

3D式ストップ・モーション 授業分析のポイント

砺波教育事務所 指導主事 中嶋 洋一

I 3D式 ストップ・モーション授業研究から何が見えてくるのか

「ストップ・モーション方式の授業研究」とは、あらかじめビデオに録画した授業を、研修会参加者のリクエストによって途中で停止し、その都度授業者に聞いたり、協議したりするものである。質問が出ない場合でも、各活動できりのいいところで止めて話し合う。だから、授業を見ていて疑問に感じたことや知りたいことが出てきたら、自由に手をあげて「ストップ!」と言える。しかし、止めてばかりでは先に進まないの、大体、5分～10分ぐらいで止め、一つ一つの活動が全体の流れとつながっているか、また教師の指導方法が理にかなったものかどうか、「何のために」「なぜ」が見えるものになっているかどうかを、各々の視点から確認していく。

3Dとは、視聴するときに3つの視点（「教師を見る」「生徒を見る」「教師の信念を見つける」）から分析するというものである。一人一役で次の視点を担当し、責任を持って後で報告する。

A: 『教師を見る視点の例』

- ① 教師の話し方はどうか
- ② 間の取り方はどうか（時間は?）
- ③ 生徒への発問はどうか、発問の種類は何種類あるか
- ④ 生徒の意見をどう拾っているか
- ⑤ 立ち位置はどうか（追いかけて、線で示す）
- ⑥ 板書や教材の提示の仕方はどうか
- ⑦ 生徒に「思考」させているか
- ⑧ 布石やゆさぶりはどうか
- ⑨ 最初に「メニュー」や「本時のゴール」を提示し、最後に「振り返り」をしているか など

B: 『生徒を見る視点の例』

- ① 教師の指示や発問に対する生徒の反応はどうか
- ② 活動量はどうか
- ③ クラスの雰囲気（空気）が変わったのはいつか
- ④ 生徒同士、教師と生徒の人間関係はどうか
- ⑤ 習慣になっていることは何か
- ⑥ 学習活動、言語活動のバランスはどうか
- ⑦ 教師の示した「めあて」や自分の「到達目標」に向けて自ら学んでいるか
- ⑧ 個人、ペア、グループのバランスはどうか など

C-1: 『流れを見る視点の例』（授業者が10年次までの若手教員のケース）

- ① 個々の活動が、到達目標とどうつながっているか
- ② 前の単元と本単元、前時と本時、次時とのつながりは考慮されているか
- ③ 4技能の総合（バランス）と4技能の統合（つながり）はどうか
- ④ スモール・ステップになっている部分とそうでない部分はどこか
- ⑤ 指導案と実際の指導に差はあったか、またはそれはどこか
- ⑥ 種々の言語活動やタスク活動は有効であったか など

C-2: 『教師の理念を見つける視点の例』（授業者がベテランのケース）

- ① 生徒指導面で徹底していること
- ② 教科の指導面で徹底していること
- ③ 教師の一斉指導・ペア活動・グループ活動のバランスから見る教師の願い
- ④ 教師の指導や生徒の動きから見る日頃の指導
- ⑤ 言葉や指示、生徒の動きから「日頃の指導」を読み解く（想像する） など

ビデオを止めた後は、3つのグループごとに協議し合う。できれば、黒板（模造紙、A3判用紙など）に、出た意見をマッピングで書き込んでいきたい。この「一つのものを見ながら話し合いを進める」という方法は、学校現場では不可欠である。話し合いをしても、各自がノートに記録をとったものを発表しているだけでは、理解に「差」が生まれることが多い。

協同作業の醍醐味は、同時に書かれているものを見ながら話をしていると、様々な意見が出やすく、共通理解も得られやすいということである。ただ、配慮しなければならないのは、マッピングはあくまでも思考の初期から中期段階までのプロセスであり、「言語化によるまとめ」が必要である。端的に、どうレポートするか（誰に、何を伝えたいのかを考えること）が大事になる。

II 授業力を高める視点とは

学校現場は、抽象的な言い方がまかり通っている。「個性」「主体的な」「コミュニケーション能力」など、頭の中で考えているイメージや捉え方がバラバラのまま、ものごとを進めていく傾向がある。最初に、学年部会、教科部会でゴール（どんな生徒を育てるのかという具体像）を話し合っておく、言葉の定義や視点をきちんと共有しておくことが、何ごとにおいても必要であることは論を待たないが、実際に行われている学校は、残念ながらごく少数である。

では、「ストップ・モーション方式」で授業研究をすることで、何に気付けるようになるのだろうか。それは、授業全体がどういう組み立てになっているかということが、3つの視点からはっきり見えてくるということである。つながりがないと、授業は成立しているとはいえない。ストーリーになっていないからだ。ストップ・モーション式授業研究は、止めることによって、つながっているように見えた活動が一旦切り離される。そこで、関連性や意味づけを考えてみるのである。こうすると、今まで見えなかったものが見えてくる。ここが普通の授業研究ではできない視点である。

ストップ・モーション式で授業を分析していくと、常に一つの活動に対して『何のために（what for）』という視点で考えるので、教師の仕掛けが見えてくるようになる。一つ一つの活動が単発ではなく、つながっているということが見えてくる。教師、生徒、流れの3つの視点から見て、全てがつながっている授業とは、一つ一つに緻密な準備と時間がかかっていることが分かる。それが出来るようになるには、常に自分を『メタ（上）』の方向から俯瞰し、日頃から『目的』を考えることが大切である。

III ビデオを視聴する上で留意すること

授業ビデオを視聴する際に、2つ確認しておきたいことがある。

1つめは、これは蒔田さん（稲岡さん）だからできる（特別という考え）とか、附属中の子もだからできて当たり前という言い訳は用意しないことである。指導したからできるようになったのである。授業をするということは、生徒（学習者）を教師の指導によって「変容させる」ということである。スポーツも学習も、その結果はすべて指導者次第であることは自明の理である。それを「生徒が努力していないから」と理由づけたり、「授業になかなか参加できない一部の生徒のせい」にしたりしては、教師の責務を捨てたに等しい。逆に、教師に「向上心」さえあれば、何からでも学ぶことができる。

2つめは、「自分の力以上のことには気づけない」ということである。もともと、自分の中に「チャンネル」や「物差し」をもっていなければ、ハッとしてメモをとることなどできない。今まで、中・高校で自分が学んできたような指導を、そのまま「当たり前」のように展開している教師は、デジタル化、AIが当たり前になる時代では生きてはいけない。授業を見せていただいて、どこかで見た活動を幕の内弁当のように詰め込んでいる授業が多いののがっかりすることがある。時間内でこじんまりとまとめようとしている。自分が問題提起したいことを、時間をかけて準備して展開する、というダイナミックさ、冒険心が感じられない。参観者にワクワク感が伝わって来ないのであれば、子どもたちも同じ気持ちだろう。

以上、2つのことを踏まえて、授業を徹底的に分析することである。すると、自分に抜けていた指導、考え方が浮かび上がってくるはずである。実際、この3D式ストップ・モーションの授業を経験した後、自分の授業が大きく変わったという教師は多い。次は、あなたの番である。